

3. 立地条件と環境資源

3.1 社会環境

1)位置

新キャンパスは、糸島半島のほぼ中央部に位置する。福岡市の都心地区から直線距離にして約16km、西区姪浜地区からは約9km、前原市の中心市街地からは約5km、志摩町の中心市街地からは約4kmの距離にあり、これらの地区に集積する商業・業務施設、宿泊施設等の利用圏域に位置する。新キャンパス用地の面積は約275haであり、東西約3km、南北約2.5kmにおよぶ。

(2)交通

現在、糸島地域の主要幹線道路としては、国道202号線、国道202号線バイパス、西九州自動車道といった福岡市都心部と前原・唐津方面を結ぶ東西幹線道路がある。新キャンパス周辺には、一般県道桜井太郎丸線、主要地方道福岡志摩線、一般県道宮ノ浦前原線等の地方幹線道路がある。

J R 筑肥線が国道202号線とほぼ平行して走り、沿線は東西につながる帯状の市街地が形成されている。新キャンパスからの利用圏内にある鉄道駅としては、周船寺駅、波多江駅、筑前前原駅等がある。加えて、現在、周船寺駅より約1 km東側に新駅が整備中であり、新駅周辺地区は伊都土地区画整理事業による都市開発が進められている。特に、学術研究都市における研究・教育活動やキャンパス生活を支援する観点から、新キャンパスと伊都土地区画整理地区との連携は、今後の重要な課題である。

九州大学学術研究都市構想の中間報告では、市街地及び鉄道駅から新キャンパスへのアプローチ・ルートとして、下記の3つの主要なルートが想定されている。

1.福岡市西区 J R 筑肥線新駅及びその周辺からのルート

J R 筑肥線新駅及びその周辺地区から新キャンパスへの主要なアクセス道路として、都市計画道路として決定されている学園通線と市道桑原3515号線(環境局道路)がある。

2.前原市波多江方面からのルート

波多江駅及びその周辺から、新キャンパスの南西部にアプローチする中央ルート(通称)構想がある。

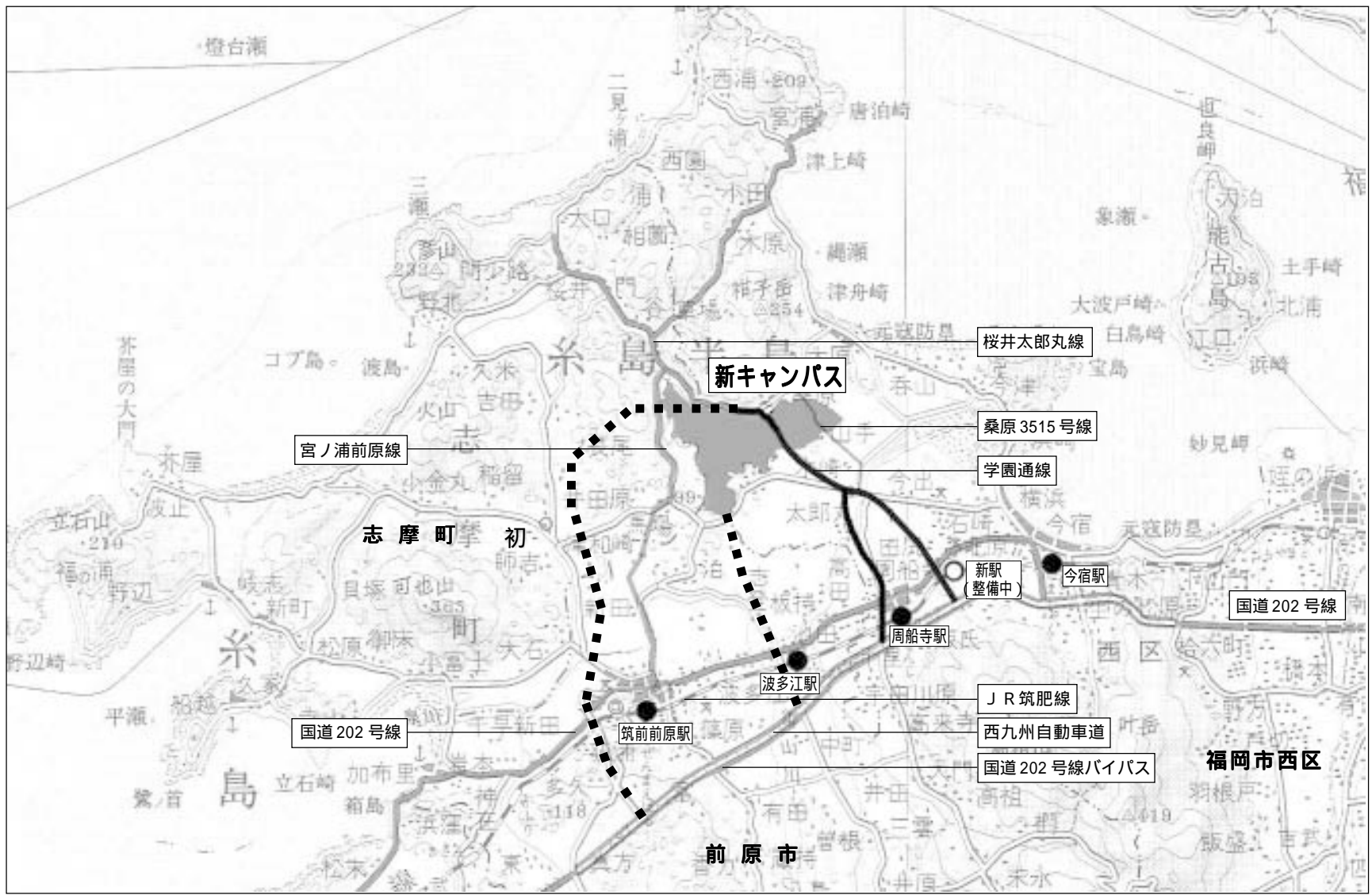
3.志摩町初方面からのルート

志摩町の中心地区である初方面から、桜井太郎丸線により新キャンパスの北西側にアプローチするルートがある。また、筑前前原駅方向から初を経由し、新キャンパスに至る学園通線延伸の構想がある。

なお、各ルートと新キャンパスとの接続については、関係自治体および関係者と協議していくことが必要である。

(3)周辺の土地利用と規制

新キャンパスの北西部には山並があり、南側には田園が広がる。また周辺には、北側に桑原、南側に元岡等の集落がある。福岡市西区、前原市、志摩町は、農地や山林等の自然地の占める割合が高く、全体の約7~8割を占め、良好な環境を有している。新キャンパス内及びその周辺には、公害関係法令、自然環境関係法令、その他関係法令等に基づく地域指定等がなされており、これらの土地利用規制の趣旨を遵守した土地利用計画が求められる。



凡例 **——** 都市計画道路(決定)
----- 構想ルート

この地図の作成に当たっては、建設省国土地理院発行の20万分の1地形図を使用した。
 0 1 2 3 4 5 km

図3-1-1 新キャンパスの位置

3.2 自然環境

(1)地質・地盤

新キャンパス用地は、南及び東側に広がる田園地帯(標高最低1m)、西側に広がる丘陵地(最高標高121m)に位置する。新キャンパス内の地形の大部分が糸島半島を南に望む小起伏丘陵地で、一部東側に平野部がある。

新キャンパス用地の東側から南側にかけては、北流する瑞梅寺川、弁天川、水崎川に沿って平野が広がり、瑞梅寺川の河口部には今津干潟が形成されている。新キャンパス用地内の地質は、主として三郡変成岩類、糸島花崗閃緑岩、沖積層から成る。

(2)気候

気候は、年平均気温15.8、年間降水量1,644mm、風速は年平均2.6m/s、風向は北東の頻度が高い。

(3)水文

新キャンパス用地の水系は、桜井川(杉山川)水系、大原川水系、瑞梅寺川(水崎川)水系の3水系に分けられる。各水系の流域面積に変化がないよう考慮すること、新キャンパス用地一帯の地下水位の極端な低下を招かないこと、新キャンパス用地周辺における河川水と溜池水の農業用水利用に支障をきたさないこと等が求められている。



図3-2-1 新キャンパスおよび周辺の表層地質

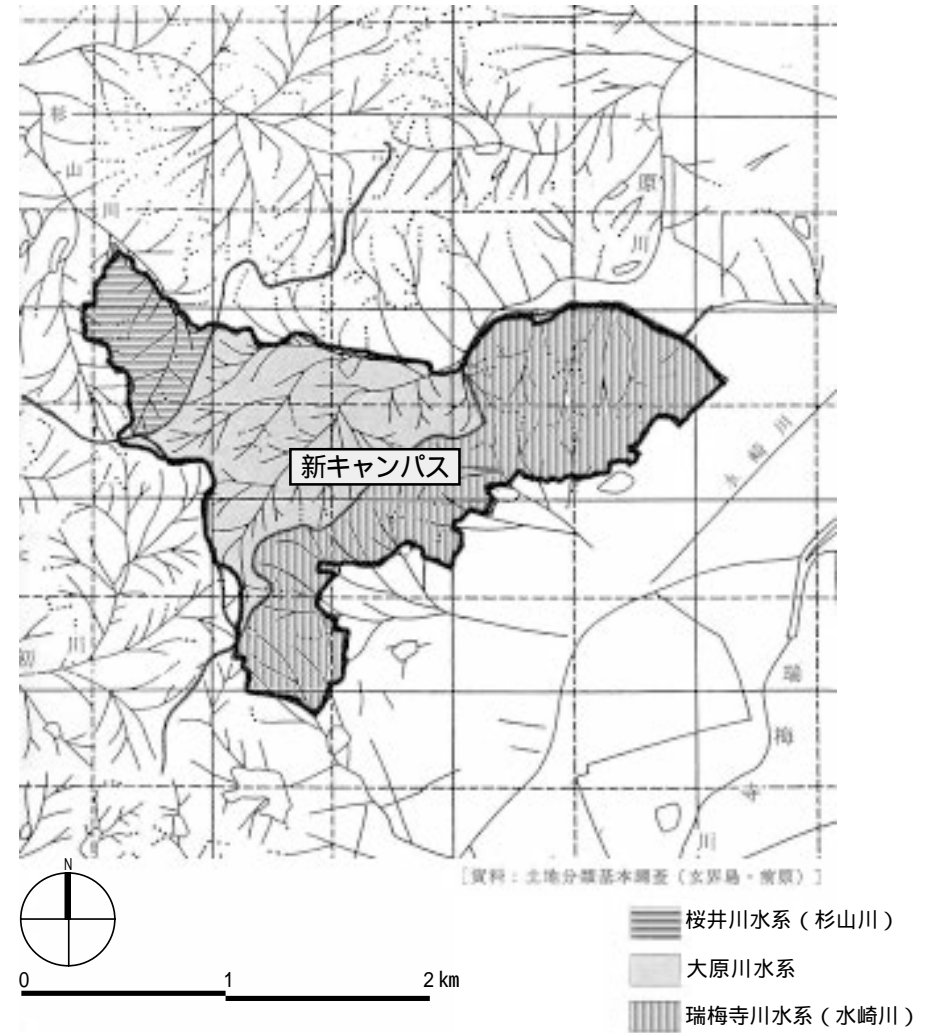


図3-2-2 新キャンパスおよび周辺の水系

(4)生態

新キャンパスを含む糸島半島は、大半の区域が小起伏の山地や丘陵地によって構成されており、古くから地形を活かした畑地や果樹園の多い地域である。周辺植生もスギ・ヒノキ植林やシイ・カシ萌芽林が多く、多様な環境が複合して存在し、全般に人為的な自然要素が加わった里山的環境を示している。

新キャンパスやその周辺は、カスミサンショウウオ、ホッケミズムシ、ゲンジボタル等が生息し、自然保護の観点から、これらの里山的環境と生物多様性の保全を図ることが求められる。なお、森林法の規定に基づき、地域森林計画対象民有林の25%以上を残置森林として確保することが義務づけられている。

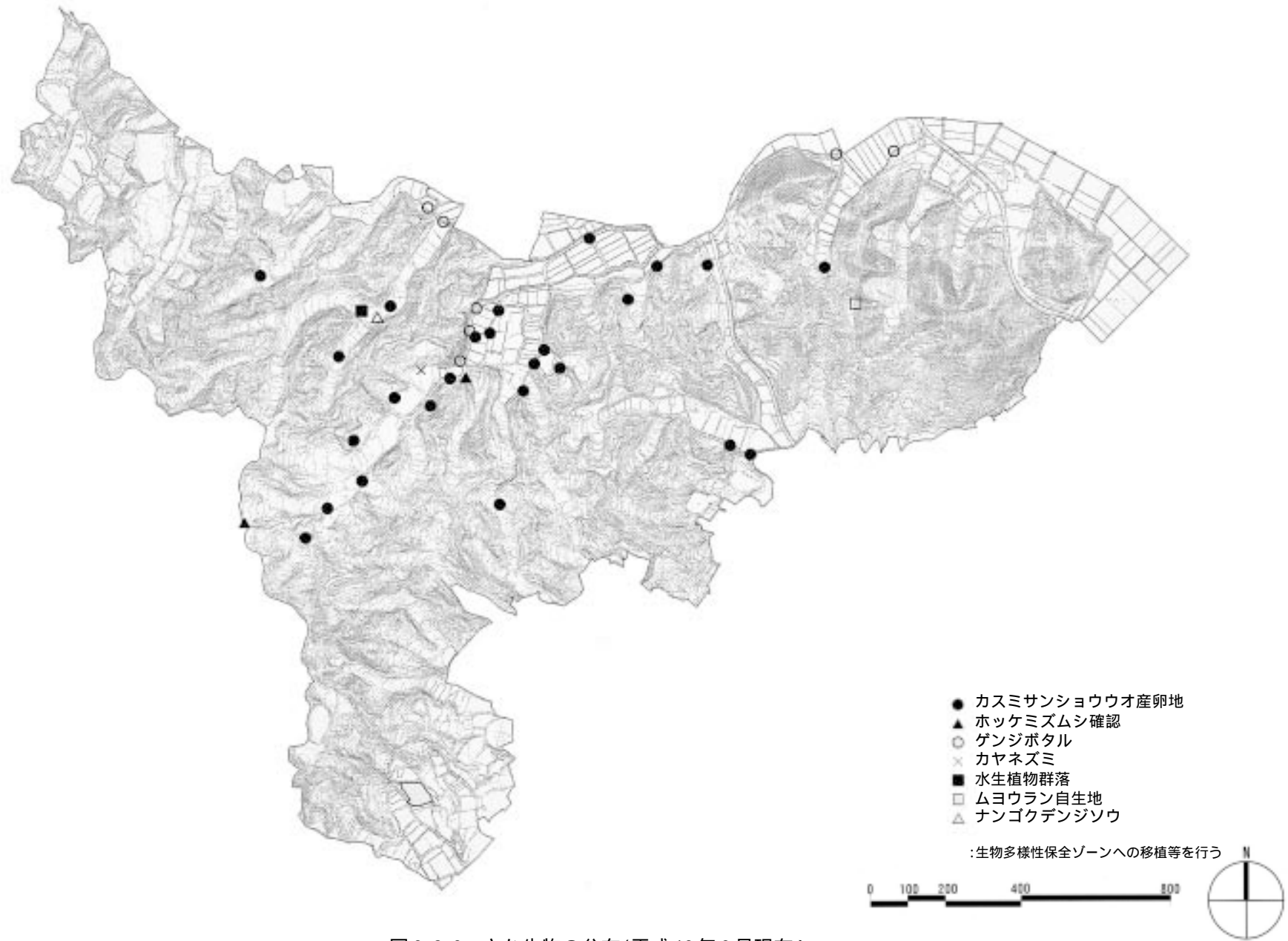


図3-2-3 主な生物の分布(平成13年3月現在)

3.3 歴史環境

糸島地域は、弥生時代には「伊都国」と呼ばれ、政治、経済、外交の拠点として、中国や朝鮮半島の文化、技術の影響を受けて発展してきた豊かな地域である。これまでに多くの遺跡が発掘されてきており、これらを研究、学習、公開する施設として、地域内には伊都歴史資料館・民族資料館、志摩町歴史資料館が設置されている。

新キャンパス内には、前方後円墳や円墳等の古墳、製鉄遺跡、集落跡、中世山城の遺構等が確認されている。それらを地域の重要な歴史的環境資源として位置づけ、保存・活用を図りながら、歴史的環境と共生するキャンパスを形成することが求められる。前方後円墳、円墳、中世山城の遺構等の埋蔵文化財の保存・活用に十分配慮した計画とする必要がある。

新キャンパス内の埋蔵文化財に関しては、平成9年7月には将来計画小委員会において、総長提案「九州大学新キャンパス基本構想における埋蔵文化財の取扱方針」が決定された。その後、新たに存在が明らかとなった古墳等や発掘調査の結果が明らかとなった埋蔵文化財の取扱いについては、学内の専門家グループに意見を求め、慎重に審議して、その保存方法等を検討している。

さらに、新キャンパス内の第20次調査によって、元号が記された木簡としては国内最古となる「大寶元年」と記された木簡が出土し、古代における嶋郡の中枢部が新キャンパス内に所在したことが解明されつつある。九州大学では、新キャンパスを含む一帯の区域が、古代の重要な位置をしめる区域であるとの認識を持ち、埋蔵文化財に対しては、今後とも慎重な対応を行う必要がある。

本マスタープランは、こうした九州大学の取組みを反映しつつ、通常の「開発／保存」という二者択一の図式ではなく、埋蔵文化財と九州大学の研究・教育施設等の立地を両立させ、それ自体が新キャンパスの特徴となるよう考慮

する必要がある。

「九州大学新キャンパス基本構想における埋蔵文化財の取扱方針」

(平成9年7月 将来計画小委員会)

- ・前方後円墳のうち、塩除、金屎、池の浦、峰、及び元岡古墳群I群1号墳の5基については開発対象外とする。
- ・石ヶ元古墳群は、30基のうち17基を現状保存、13基を記録保存とする。
- ・その他の円墳38基のうち18基を現状保存とする。
- ・水崎城の中心的遺構及び馬場城の南側遺構については、現状保存とする。

「取扱方針」以降の主な決定事項

- ・「新キャンパス用地等における埋蔵文化財の取扱いの基本的考え方(平成12年5月 将来計画小委員会)」において、「取扱方針」決定以降の調査で発見された埋蔵文化財については、「開発／保存」という二者択一ではなく、キャンパスと埋蔵文化財を両立させ、それ自体がキャンパスの特長となるよう考慮すべきであり、そのためには、現状保存から記録保存までを以下の～に分けて取り扱うことを決定した。

・現地をそのまま保存するか、学内外に展示公開するため復元・整備する。

・土盛り等によって、遺構を破壊しないかたちでキャンパスとして利用するが、遺構の部分については位置関係と構造を正確に復元して展示公開する。

・土盛り等によって、遺構を破壊しないかたちでキャンパスとして利用する。

・記録保存した後造成し、キャンパスとして利用する。

- ・「元岡古墳群E群(前方後円墳1基,円墳2基)」は の取扱い、「元岡遺跡群7次調査地(古代製鉄関連建物群)」は の取扱い、「元岡遺跡群12・15次調査地(古代製鉄遺構)」は の取扱いで、それぞれ対処することを決定している。

